

第10回人類学関連学会協議会合同シンポジウム

群れる・集う

— 人間社会の原点を問う —

2015年10月11日(日) 13:00~16:30

関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス

日本民俗学会第67回年会併催

プログラム

開場	12:45
開会 開会あいさつ／趣旨説明	13:00
1. 「ムレ（ムラ）と排除」	
市川秀之（滋賀県立大学人間文化学部、日本民俗学会）	13:10
2. 「ゴカイ類の群れに集う人々 一食・信仰・宇宙で通ずるアジア太平洋の伝統的社会—」	
古澤拓郎（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、日本人類学会）	13:40
（休憩）	14:10
3. 「ともに生きる ー共同研究「人類社会の進化史的基盤研究」の試みからー」	14:20
河合香吏（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、日本文化人類学会）	
4. 「“集まる”ことと“散らばる”こと、そして“共に生きる”ことと“争う”こと ー霊長類学のフィールドからー」	
高畑由起夫（関西学院大学総合政策学部、日本霊長類学会）	14:50
5. 「集団の形成と共感 ーヒト脳の進化とのかかわりー」	
元村祐貴（国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所、日本生理人類学会）	15:20
（休憩）	15:50
6. 討論	16:00
閉会あいさつ	16:30

コーディネーター：小嶋博巳（ノートルダム清心女子大学文学部、日本民俗学会）

印南敏秀（愛知大学地域政策学部、日本民俗学会）

ムレ（ムラ）と排除

市川秀之（滋賀県立大学人間文化学部 日本民俗学会）

ムラ（村）とムレ（群）は同じ語源から発した語だという説があつて、辞書などを引いてもそれなりに流通している説のようである。確かに人が群がって住む場所をムラというのは一般的な理解であろう。しかしながらさほど広くもない日本のなかにも様々なムラの形態があるのもまた事実である。近畿地方の平野部などではぎっしりと人家が密集したムラの形が普通に見られるが、それでも山間部にいくと家がまばらに建つ景観をみることがある。なぜ人は固まって住むのだろうか。現在そこに住む人に対して、この問いを發してみても明確な答えが返ってくることはない。散村に住む人になぜ固まって住まないのかと問うてみても同様であろう。

歴史的に見れば現在よく見られる集村という住まい方が不変のものでないこともまた確かである。歴史地理学や考古学の成果は、古代や中世前期には、人は結構離れて住んでおり、中世後期に至って集村が形成されたことを明らかにしている。この發表で取り上げたいのは人が集まって住むということに伴うケガレの問題である。とりわけ墓地の問題に着目したい。近畿地方のムラでは、集落から少し離れた場所に墓地を作る。その多くはムラ単位の墓地である。民俗学が注目してきた両墓制のムラでは、ムラの内部の寺院境内などに石塔が建ち（詣り墓）ムラから離れた場所に埋葬地（埋め墓）があることが多い。現在では死者の大半は火葬されるが、その火葬骨もかつてからの埋め墓に葬る例が多い。現在の都市においてもその外周部に集団的な墓地が存在することが普通である。しかしながら、地方によっては、家の近くの畑の中や、すぐ横に埋葬地をもつ場所もある。聞き取りをすると、そのほうがいつでも墓参りができて都合がよいのだという。そこに死に対するケガレ観念を感じることはできない。

再び歴史的な考察に戻ろう。中世前期、すなわち屋敷地が散在していた段階では、屋敷地内部に墓を設けることがよくあつた。これは中世考古学が明らかにした成果であるが、やがてこのような屋敷墓はなくなり中世末から近世初頭にはムラ単位での墓地が形成される。ただしこれは発掘のよく行われる平野部でのことであつて、山間部などでは屋敷墓は今も存在する。このような墓地立地の推移は先に述べた集村化の動きに伴うものであろう。人が集まって住むことの意味は多様である。土地開発と農業水利の関係や、外的からの防禦、あるいは防災などに集村化の原因を求める説はあるが、広い範囲で生じた現象であり、おそらくはそれらが融合して生じた現象と思われる。そしてこのようなムラ（＝ムレ）の生成にともなつて、死のケガレが強く意識され、死骸をムラの外部に埋葬することとなつたことは間違いない。人が集まって住むことによる他者との距離感がこのような新たなケガレと排除を生み出したのだろうか。そしてこのようなムレと排除の関係は、死のケガレに限るわけでもなさそうである。

第 10 回人類学関連学会協議会合同シンポジウム

群れる・集う ―人間社会の原点を問う―

2015 年 10 月 11 日（日）

「ゴカイ類の群れに集う人々——食・信仰・宇宙で通ずるアジア太平洋の伝統的社会——」

古澤拓郎（日本人類学会、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

インドネシア・ロンボク島南部のある浜辺では、現地サック人の在来暦法で 10 番目の月の 20 番目の日に、ゴカイ類がごく短時間の間だけ大量発生し、それを採るためにたくさんの人々が集まります。この時には、地元政府によって盛大なお祭りが行われます。その数日後、そこより東のスンバ島でも、やはりゴカイ類が発生し、それを採取することを合図にして、壮大な騎馬戦儀礼が始まります。インドネシアでは、他にもアンボンや、サブ島をはじめとして、様々な地域で似たようなことが行われます。採取したゴカイ類は、もちろん食用にされるのであり、儀礼食、日常食、保存食、調味料などとして用いられます。このゴカイ類の大発生と、それを食する文化は、南太平洋のサモアやフィジーなどでも見られますが、インドネシアとは 4 か月程度ずれています。



このゴカイ類の群れに、人々が集うことを調べてみると、人類学的に興味深い点が多いです。それはまず、人類は何を食料に選んできたのか、ということです。同じ島に暮らしていても、このゴカイ類を「気持ち悪いもの」と認識して食べない人々もいます。

それから、この大発生は極めて規則正しく毎年起こるため、西洋のカレンダーが到来する前の、天体観測に基づく伝統暦で、重要なイベントに位置づけられていることです。興味深いことには、インドネシアでもこの地域は乾季が厳しいため、農業のため、ひいては生存のためには暦が重要な地域でもあります。

さらに、この大発生は生物学的には生殖群泳であり、年に 1 回ないしは 2 回だけ、生殖のために海面に集まる現象です。これに人々が集まる訳ですが、これが村同士つまり異なる集団が交わる機会にもなっています。

人類学、特に集団生態学的には、生態学的・地理的な単位や、社会的な境界を基にして、分析上の集団を設定してきましたが、このゴカイ類生殖群泳をめぐる人々の動態は、集団の概念にどのように位置づけられるのか。現地調査と文献研究（※故・五十嵐忠孝先生の遺された文献情報を基にしています。）と考察を通じて、集団というものを改めて見つめなおしてみます。

第10回人類学関連学会協議会合同シンポジウム
群れる・集う—人間社会の原点を問う—

ともに生きる—共同研究「人類社会の進化史的基盤研究」の試みから—

河合香吏（日本文化人類学会、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

われわれ人類は、家族、仲間、民族、国家など、大小さまざまな集団の中で他者とともに生きている。一生物種としての人類は、群居性動物である霊長類の一員として、集団で生活する術を進化させてきた。人類も人類以外の霊長類たち（以下、霊長類と略す）も、さまざまなかたちで群れ、集い、平和的に、あるいは敵対的に、またあるいは相互に最小限のかかわりを維持しながら、他者とともに生きている。本報告では、2005年度から東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所において、霊長類生態学／社会学、生態人類学、社会文化人類学の3学問分野に与する研究者が集って継続してきた共同研究「人類社会の進化史的基盤研究」の歩みを紹介しつつ、そこで得られた知見や議論から、「群れる・集う—人間社会の原点を問う—」という本シンポジウムのテーマに接続できそうな話題を提供したい。

上記の共同研究は、テーマを「集団」、「制度」、「他者」と展開しながら進められてきたが、その全体に通底する課題をひと言でいうならば、「人類が進化の過程で獲得してきた高度な社会性（sociality）の基盤の解明」である。ここで言う「社会性」とは、「同所的に他者とともに存在する」、すなわち「集団をなして生きてゆく」ための能力であり、集団の中で同種他個体の共在・共存を保証する能力である。こうした高度な社会性の獲得は、人類という種そのものの成立における最も重要な特質のひとつとみなすこともできよう。

集団には、それを成立させ、維持するための何らかの原則ないし力学が存在する。逆にいえば、現実に複数の個体が集団を成して暮らしているという事実自体が、そこに共在・共存のための、何らかの原則ないし力学があることを示している。われわれはそこに、制度の起原や萌芽的なありようをみようとしてきた。人間の生活世界には、その隅々にまで、さまざまな制度が、あるときは人為的な法的制度として、あるときは半明示的な道徳律として、またあるときはより暗黙的なコンヴェンション（因習、習律）として、浸透している。これらは言語によって媒介、構築されていることは確かであるし、通常社会科学の制度論はこの前提に立つ。だが、われわれの射程はこうした前提の奥にある進化的な基盤に及ぶ。それは、個体間の関係を律する行動原理であり、霊長類の社会に視野を広げてみて初めて理解できるような「原制度＝プロト制度」ともいうべきものである。

人間的な音声分節言語をもたない霊長類たちもまた、それぞれの種特異的な構造をもつ集団の中で、自らの行為を調整しつつ、他者とともに生きている。ここでは「他者」は、哲学や倫理学のように抽象的な思弁の対象ではなく、「相互行為（インタラクション）の相手」という具体的な文脈における個体ないし個体群のことである。それは、日常的に同所的に存在し、互いに同調したり、共感したりできる相手である。同調や共感による他者理解は、自他の一体化を促進して「私たち」という集団を生み出す。同時に「私たち」の外側に新たな「他者（他集団）」が生み出される。こうして「他者」をめぐる諸現象は、「集団」の生成や、それを維持してゆく行動原理としての「制度」の問題へと連なってゆくのである。

“集まる”ことと“散らばる”こと、そして“共に生きる”ことと“争う”こと～霊長類学のフィールドから～
高畑由起夫（日本霊長類学会・関西学院大学総合政策学部）

今西錦司はかつて、集まって“社会”を作る種も、“ばらばら”に散らばって生きる種も、それぞれの“種社会”という構造の中で生活する点では同じだと喝破しました。そこでは、“集まる”ことと“散らばる”ことはトレードオフです。なぜ“集まるのか？”を理解するためには、なぜ“散らばるのか？”を、そして“なぜ共に生きるのか？”については“なぜ争うのか？”を理解しなければいけない。そんな視点から話題を提供します。

まず、「リンゴの実はなぜ赤い？」というエジソン少年の疑問をマクラに、レベルの異なる4つの解答を紹介しましょう。

1. 近接メカニズム＝赤い色素が細胞に蓄積
2. 発達＝実が熟すると赤化するよう遺伝子がプログラムされている
3. 機能＝種子散布者（＝トリやサル）へのシグナル＝すなわち、“Eat me!”
4. 進化＝種子散布者との共進化：果肉を提供して、種子散布をお願いするという“共生”の進化

しかし、なぜ（お駄賃を付けても）子を散らばす必要があるのか？ それは、実が親木のそばに落ちると、

1. （太陽光等の資源をめぐる）親子間の競争が生じる
 2. 親木から子の木へ寄生虫や病原菌が感染するかもしれない
 3. 親子の木々で近親交配が起き、近交劣勢が生じるかもしれない
 4. 進化での競争を考えると、子を分散させて新しい生息地をめざす方が生き残る可能性が高くなる
- これらのリスクと利益のために子を分散させている、とすれば、ヒト（やサル）の集団においてこれらのコスト／リスクを補い、分散の利益をさらに上回る利益がなければいけない。それは何か？ =本日のテーマ

それでは、サルはなぜ集まるのか？ おそらく、それは以下の1と2がきっかけだと思います

1. コドモへの投資の延長：血縁選択＝母（メス）からだけではなく、第三者からの直接／間接的サポート
2. 配偶者の持続的確保＝雌雄間の繁殖戦略のすり合わせ
3. こうしてできた“集まり”が捕食者からの防衛と“ナワバリ”維持をになう＝集団防衛と資源確保
4. 集団の輪郭が明確化 → 帰属意識の誕生 → 他集団への敵対的關係

例えば、ワオキツネザルの母系的集団では、

1. メスは血縁関係で結ばれ、集団と行動圏を維持＝血縁選択。その際、メスの競争は2重（Within/Inter group competitions）
2. オスは性成熟前後に出自集団を離脱（近親交配回避）
3. 非出自オスが数年間群れオスとして滞在（配偶者確保）
4. 認知能力の低さから、“追い出し／分裂”が頻発：基本は“不平等”な中での不安定な“共存”



それでは、ニホンザルは？

1. 基本型はワオキツネザルと同じ
2. “不平等”な中での“共存”、あるいは“不平等”だからこそその“共存”
3. ある意味、“ゆらぎ”の少ない安定した保守的社会システム
4. “性”は非日常的世界であり、日常的世界はむしろ“非性的”



とすると、チンパンジーは？

1. 集団への帰属意識を持ちながら、別れと出会いを繰り返す
2. 集団は敵対的、片方の集団を“消滅”させてしまうことも（戦場への入口？）
3. 行動や交渉の多様性とそこでの“ゆらぎ”は“ヒトとの近しさ”を感じさせる



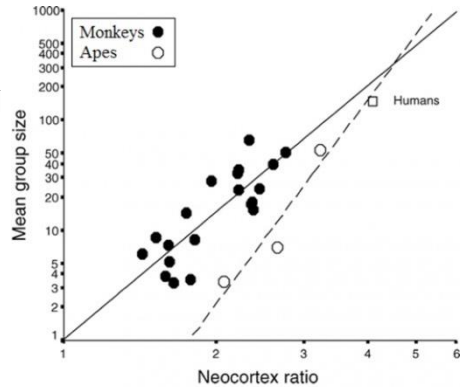
一方で、ヒトでは、

1. チンパンジーには存在しない家族によって、多産性を確保
2. 雌雄（女男）関係と親子関係の結びつきは、やがて系譜や“民族”につながる？
3. 家族の連合が集まり（社会）になったのか、集まりの中で家族が結晶化したか？
4. “言葉”が、共同幻想としての社会集団をさらに強固なものにした？
5. その“共に生きる”はずの集団にやがて“殺人”や“戦争”が起こるのはなぜ？

集団の形成と共感・ヒト脳の進化とのかかわり-

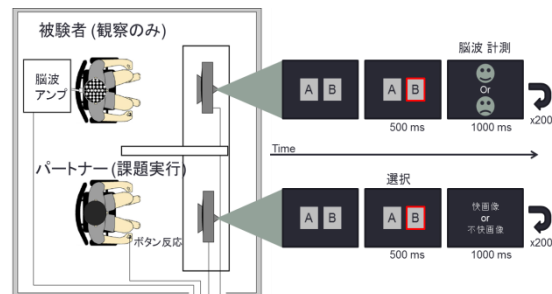
元村祐貴（日本生理人類学会、国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所）

ヒトは鋭い爪、牙、温かい毛皮を持たず、運動能力も低く、一人で自然の中に放り出されるととても生きてはいけないような、非常にか弱い生き物である。厳しい自然の中で生き抜くために、ヒトは古来より集団を形成し、その中で生きてきた。生き抜くための集団形成は、ヒトの脳の進化に思わぬ影響をもたらした可能性が示唆されている。Robin Dunbar は、大脳皮質が脳全体に占める割合（皮質化指数）を霊長類の種間で比較した結果、霊長類の皮質化指数は集団のグループサイズと関連することを報告している。その中で最も大きなグループサイズと、最も発達した脳を持つのが我々ヒトであった（右図、Dunbar, 1998）。この結果をもとに、ヒトをはじめとする霊長類の大脳皮質が複雑な社会に適応するために進化したとする社会脳仮説が提唱されている。



ヒトの集団生活の中で、他者への共感是非常に重要な役割を果たしてきたと推察される。共感とは、他人の感情や置かれている状況によって、自身にも同様の、もしくは関連した情動が引き起こされる現象であり、他者と情動的な体験を共有し、社会的な相互作用を円滑にするために重要な精神機能である。古代において、共感には特に母子間や同じ集団の仲間の間での養育・保護行動を促進し、他者の状態の「素早く、正確な」理解に貢献していたと予想される。例えば、他者の恐怖を即座に感じ取ることは生命の危険が迫っている事の迅速な発見に役立つ。さらに、情動を共有することによる、「他者と自分の心的状態がお互いに正確に共有されているという感覚」はコミュニケーションを促進し、集団内の結束を高めたであろう。現在のヒトの社会では、他者への共感が生きていく上で必要不可欠な要素であるとともに、幸福度や生活の質を左右する大きな要因ともなっている。

発表者の所属する日本生理人類学会においては、現代に生きるヒトに遺されている機能について生理学的手法を用いて詳しく検討し、その生理的意義や機能的潜在性の解明、現代社会への適応方法の理解を目指している。発表者は脳科学的な手法を用い、現代の我々の共感機能がどのような特徴を持っているのか調査し、それが進化的にどのように形作られてきたのかを考えるヒントを得るための研究を行っている。親しい友人と初対面の他人に対して、共感的な脳の反応がどのように異なるか、64ch脳波計を用いた実験(下図)を行った結果、他者のネガティブな出来事に対する脳活動は友人、他者の両方で強く観察されたのに対し、ポジティブな出来事に対する脳活動は友人に対してのみで観察され、共感的情動価（正か負か）によって、友人、他者に対する脳の反応が異なることが示された。発表者はその要因に集団内における共感の進化的意義が関わっていると予想している。



以上を踏まえ、本発表では、ヒトの集団形成に関する人類学的視点と、共感の脳科学的知見より、共感が人類史の中で果たしてきた役割、その起源、共感研究の人類学への貢献について考えたい。

引用文献：Dunbar, 1998, The Social Brain Hypothesis, Evolutionary Anthropology.